

Title	土居通夫君傳, 半井桃水編
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.4 (1924. 11) ,p.155(625)- 156(626)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19241100-0156

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

最後にかく有益の書を寄贈せられたる石川縣に深謝し且本調査に努力せられたる同縣囑托上田三平氏に深甚の敬意を表するものである。
(大正十三、九、六 武田勝藏)

神戸市史(本編(神戸市各説(役所編))

本書は曩に上梓せられた神戸市史本編總説と相俟ちて、同市史の樞軸を成せるものである。總説に於ては専ら時代を分つて沿革を概観し、各説に於ては各項目に互りて市の發達を細叙せしものである。本書は左の十五章を收めて居る。

- (一) 産業の發達及び富の蓄積、(二) 生活狀態の變遷、(三) 人口の増殖、(四) 市の膨脹及び充實、(五) 市政機關の沿革、(六) 市營事業、(七) 市の財政、(八) 衛生、(九) 土木、(一〇) 勸業、(一一) 救恤、(一二) 教育、(一三) 外事、(一四) 兵事警察並に消防、(一五) 行幸啓式典並に褒賞

右の各章は何れも明治初年より記述して最近に至り、其章末毎に引用書目を附記し文章も亦甚だ簡明である。同市史の全部完成の上は大阪市史、名古屋市史等と共に市史の模範たるべきものと思ふ。
(大正十一、九、一 武田勝藏)

土居通夫君傳(半井桃水編)

本書は關西實業界の重鎮故土居通夫君の行實である。(菊版約九百頁) 始め大阪朝日新聞記者故須藤翠南氏が故翁の令嗣剛吉郎君

の依頼により起稿したる處、業半ならずして同氏は物故せられたので、翠南氏の親友にして前同新聞記者半井桃水氏これが續稿を引受られ遂に完結を見るに至つたものである。

翁の閱歷は知る人多く、今更改めて記す要も無いが、未知の人の御參考迄に、左に其の概要を摘録する。

翁は諱を通夫、號を無腸、通稱を彦六と云ひ、天保八年四月廿一日伊豫國宇和島藩士大塚南平祐紀の六男として生れ、幼名を万之助と呼ぶ。始め松村彦兵衛清武に養はる、所となり、名を保太郎と改めたが、後、出で、土居氏を冒すに至つた。翁は先づ漢學を修め、尋いで蘭學に及びたるも、中途にしてこれを廢した。當時は開國鎖國の兩論紛糾の秋であつたので、翁は至誠奉國の志を立て、遂に脫藩し姓を變じて、京阪の間に往復し、勤王の諸士と交を結び、大いに國事に奔走する處があつた。明治中興となるに及んでは外國事務局、司法省に歴任し、明治十七年自ら思ふ所あつて致仕し、爾來身を浪華の實業界に投じ、一意衷心拮据經營して其發展に努め、明治廿七年には選ばれて代議士となり、又其翌廿八年には押されて大阪商業會議所會頭となり、爾來其職にある事二十有二年、實に關西實業界の元勳である。明治三十三年歐米各國を巡遊して、其の商工事業を視察し、其後四十二年再度米國に赴き、又翌年支那を訪づる、等の事があつた。時に翁年七十を超ゆる事五歳、衆皆な其の壯を稱せぬものは無かつたといふ。大正四年即位大典の節は全國功勞者中より選拔せられ特に叙勳の恩命に浴し、益々我が實業界に盡瘁する所があつた。六年九月九

日病を得て遂に危篤に陥入り、特旨を以て位階陞叙の御沙汰を拜し、即日卒去せられた。享年八十有一（正五位勳三等）實に翁の如きを眞に立志傳中の人物と稱すべきである。

本書は行文平易にして、これを繙閱する時は、余の如き曾て翁の警咳に接せざる者も雖ども、自ら其の溫容の髣髴として目に在るが如く感せしめ、又よく敬慕の念を想起せしめる。猶本書には翁の日記、手控、備忘録、感想録、紀行、詠草等を多く引用して居るが、是れ等の日記類は數個の筐匣に充填するに云ふ事である。實に翁の健筆には驚嘆せざるを得無い。

令嗣剛吉郎君翁の偉徳を後世に傳へむが爲に本書を編纂せしめて弘く萬人に頒たる。又以て後進を誘掖啓發する所少なからざるものと信ずる。

最後に令嗣剛吉郎君に敬意を表し、且編者故須藤翠南氏、半井桃水氏の勞を謝して筆を擱く、ここにす。

(大正十三、九、十五夜 武田勝藏)

日本民謡選集 (霜田史光編)

新詩壇社發行

本書は外題の通り我國民謡中代表的と思はれるもの、一部を別離の情を歌つたもの、戀慕の情を歌つたもの、嗟嘆の情を歌つたもの、享樂的氣分を歌つたもの、人生觀を歌つたもの、生活に歌つたもの、自然を歌つたもの、親子の情を歌つたもの、希望を歌つたもの、雜、

に分類して収集したもので、終に各種民謡解説、註釋が附してあ

る。編者は其各種民謡解説中に次の如く説述して居る。

民謡は國民全體の聲であると同時に、國々の各局部的な地方色をよく出してゐる。それは交通不便な昔時に於ては、殊に明らかである。自然の影響はどんなに人々の感情を支配するものだらうか、民謡の始は自然の影響から來てゐることは疑ふ由もない、海岸に打ちつける怒濤の豪快にして悠長なる調べは、いつの間にか磯節となつて人の口にのぼる。又追分節の優婉にして哀調を帯びたる曲節は、北國の山々の曲線を思はせる。このやうに總ての節が何か知らその邊の自然の情景を思はせるのは、やがて人々が、如何によく自然と親しんだ生活を辿つて來たかといふことを示すものである。これは單に曲節の方面からのみ見たのであるが、その歌詞から見ても明かに前のやうなことは言へるのである。

さて民謡は貴重な郷土資料なる事は今更記すまでもない。其の民謡には其の國々の地方色がよくあらはされて居るもので、野趣横溢真情直露である爲に、まゝ卑俗な多少醜猥に近いものを聞くが、その歌詞歌調によつて其處の人情、風俗、習慣、傳説、環境等を知る事も出來、又時には類歌等の比較研究によつて其地と他地との交通の繁閑の程度をも知る事が出來得るのである。近來一方に民謡童謡の創作が流行すると共に、他方に郷土の民謡童謡の蒐集並に其研究も起り、最近には爐邊叢書中に熊野民謡集が上梓せられたが、民俗學の爲め慶すべきである。新唄流行の今日に一日も早く父祖の口遊んだ民謡を蒐集するのは目下の急務である。切に